

# 混乱の時代を経て、そして…

## 各校の勤労作業

### 山口高等商業学校 (山口経済専門学校)

昭和13(1938)年に集団勤労作業が開始され、夏期休暇中に全生徒は6日間仁保川支流の河川改修、築堤作業に従事した。昭和14(1939)年夏、文部省主催で「興亜学生勤労報国隊」が組織され、山口高商からは助教授1名、生徒6名が参加した。また昭和17年には、修業年限が6カ月の短縮となり、教練、勤労作業の時間が著しく増えていった。



榎野川改修(昭和14年)

### 山口高等学校

旧山高でも、榎野川の堤防強化作業が実施された。昭和16年には、稲刈奉仕や蕎麦の刈入れが行われている。また、1年生は1週間、広島へ奉仕作業に出掛け、団体訓練、時局認識等の体験をした。昭和19年、3年生が工場に出動し、翌年には、2年生が彦島へ、新入生は防府市の協和発酵へと動員された。



集団勤労作業の様子(昭和15年)  
(山口高等学校團誌「鴻南」1号)より)

### 山口県師範学校 (山口師範学校)

昭和13年に開始された集団勤労作業は、その後恒常化され、出征軍人家庭の田草採り、道路の修繕なども行っていた。師範学校の勤労動員は教員養成の重視から特例として扱われてきたが、しだいに戦局が苛烈を極め、昭和19年には、師範学校生徒でも例外なく勤労動員に駆り出されることになった。

昭和20年4月、戦前最後の師範学校生徒が国民学校高等科を卒業して入学した際、本科生徒はほとんど学外勤労に動員され、残った予科生徒にも授業らしい授業はなく、山口大神宮奥での農場開墾作業等が毎日のように課せられた。



下関石切場での集団勤労作業  
(昭和14年7月21日～25日)

## 宇部高等工業学校(宇部工業専門学校)

工場や鉱山での集団勤労作業の傍ら、宇部高工では軍事教練が行われた。萩20里夜間行軍は体力の限界に挑むもので、歩兵銃を担ぎ、砂袋の入った重い背嚢を背負っての宇部から萩間の夜間行軍は、後々まで語り草になった。



重い背嚢を背負っての行軍

## 山口県立小郡農業学校

昭和16(1941)年以降、勤労働員は農村労働から工場労働へと移行され、修業年限を短縮して産業部門へ配置された。獣医科の生徒48人は、移動家畜診療班を結成し、県下各地に出動し獣医師不足緩和を図った。期間中、診療した牛馬は延べ2,000頭にも上った。



山口県立小郡農業学校報国隊

(『山口県立山口農業学校百年史』より)

小郡農校からも「興亜学生勤労報国隊」として農科、農蚕科、畜産科の10人の学生が安達県薩爾岡(サルト)に派遣された。また、北海道の農業従事者の不足を補うため、「北海道勤労報国隊」として派遣された。

## 山口高等獣医学校(山口獣医畜産専門学校)

昭和19年、大津郡で道路及び橋梁の災害復旧作業などに従事した。昭和20年4月には、入営延期が認められなくなった。そのため専門学校へ改称後の初めての新生50名の大半は、入学後2ヶ月足らずで学徒動員令により、鳥取種馬所(6名)、福岡県種育場(6名)、四国種馬所(5名)に分散動員されたり、軍隊へ応召するなど学舎を離れていった。

## 山口県立医学専門学校

疎開家屋の解体作業や、特牛や大津郡人丸で壕掘作業を行った。また、医学の知識を活かして昭和20(1945)年の宇部大空襲の際には、負傷者の治療にあたり、8月には原爆投下直後の長崎に赴き救護と調査にあたった。

昭和20(1945)年春、県下の高等教育機関は、山口高等学校、山口師範学校、山口青年師範学校、山口経済専門学校、山口県立医学専門学校、宇部工業専門学校、山口獣医畜産専門学校となっていた。そして8月15日の終戦を迎えた。

学園では、学生や教職員が学徒動員や軍隊から徐々に復員した。混沌とした世相ではあったが、暗い戦争の谷間を抜けだした解放感に学生達はひとまずの自由を胸一杯に吸える充実感にあふれていた。